

A 語句の意味と読み

(1) すずり / 墨をする道具。文章を書く場面

(2) することもなく退屈だ。手持ちぶさたで所在ない。

／★書名『徒然草』の由来になった、序段の最重要語

(3) 朝から晩まで。一日中。 / x虫の「ひぐらし（蜩）」とは別の語

(4) とりとめのないこと。つまらないこと / 「由（よし）＝わけ・筋道・由緒」＋「なし」で「筋道がない」 / 「由」は「わけ・理由」の意

(5) これというあてもなく。とりとめもなく。なんとなく。 / 「そこはかとなし」＝どこ（はっきり）特定できない

(6) 気が変になりそうだ。正気を失いそうだ。 / 「もの」は「なんとなく」の意を添える接頭語

B 文法

(7) 形容動詞（ナリ活用） / つれづれなり / 連体形 / 下の「ままに」に続くので連体形

(8) ～にまかせて。～のままに。 / ここは「退屈なのにまかせて」

(9) うつり（ラ行四段動詞「うつる」連用形） / ゆく（カ行四段動詞「ゆく」連体形） / 「よしなしごと」にかかる

ので連体形。意味は「次々に浮かんでくる」

(10) 已然形（「書きつくれ」）に接続し、順接の確定条件（～すると・～していると）を表す。 / ★未然形＋ば＝順接の仮定条件「～なら」との区別が頻出

(11) 形容詞「あやし」の連用形「あやしく」。ウ音便。 / 意味は「妙に・不思議に」

(12) シク活用・已然形 / 形容詞「ものぐるほし」の已然形

C 係り結び

(13) 係助詞「こそ」を受けて、文末が已然形「ものぐるほしけれ」で結ばれている（係り結び）。意味を強調する。

(14) 終止形「ものぐるほし」

(15) ぞ・なむ・や・か＝いずれも連体形で結ぶ（「こそ」だけが已然形）

D 口語訳

(16) することもなく退屈なのにまかせて。

(17) 一日中、硯に向かって。

(18) 心に次々と浮かんでは消えていくとりとめのないことを、これというあてもなく書きつけていると。

(19) （自分でも）妙に、気が変になりそうな心地がすることだ。

E 内容・記述（解答例）

(20) 退屈なのになんかまかせて、一日中、心に浮かぶことを書きつけている。(二十九字)

(21) 心に次々と浮かぶとりとめのないことを、あてもなく一日中書きつけているうちに、自分でも異様な気分になってきたから。

(22) 「つれづれ」＝することもなく退屈なさま・所在なさ

F 文学史

(23) 作者＝兼好法師（吉田兼好・ト部兼好）／ジャンル＝随筆／随筆＝見聞や体験・感想を、筆の進むままに自由につづった文章

(24) 鎌倉時代の末期（十四世紀前半ごろ）

(25) 三大随筆／枕草子（平安中期）→方丈記（鎌倉前期）→徒然草（鎌倉末期）

暗誦チェックの答え

（ ）なるままに、日暮らし、硯に向かひて、 → **つれづれ**

心にうつりゆく（ ）を、そこはかとなく書きつくれば、 → **よしなしごと**

あやしう（ ）ものぐるほし（ ）。 → **こそ／けれ**

【現代語訳（全文）】

することもなく退屈なのになんかまかせて、一日中、硯に向かって、心に次々と浮かんでは消えていくとりとめのないことを、これというあてもなく書きつけていると、（自分でも）妙に、気が変になりそうな心地がすることだ。